

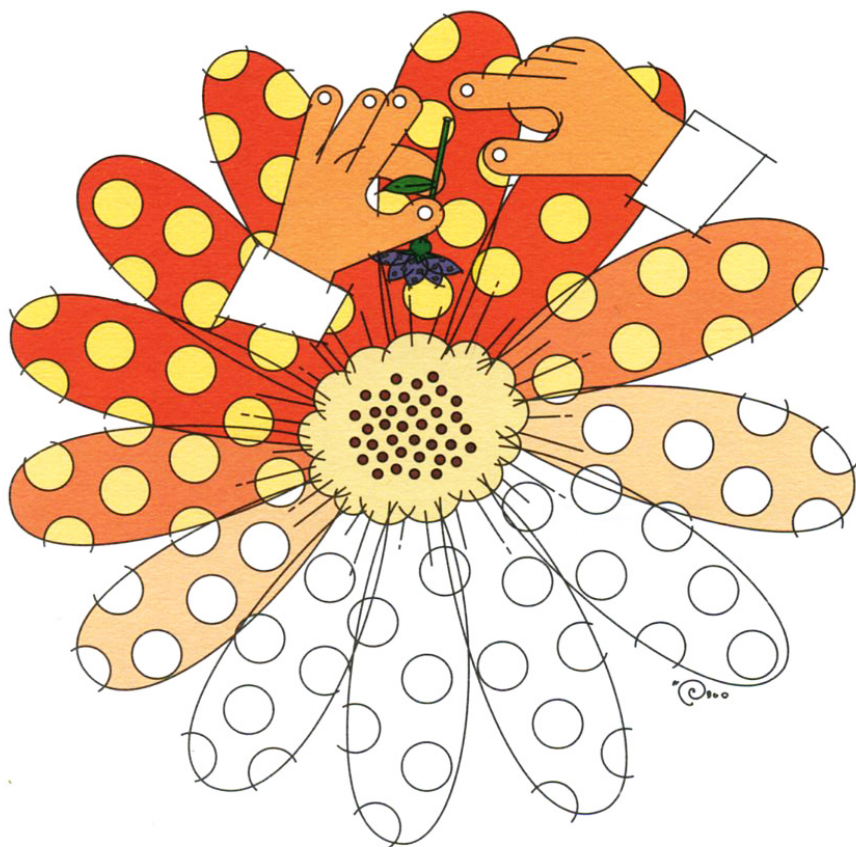
東洋療法とあなたを結ぶ情報誌・フントス……………「いっしょに」

# JUNTOS

フントス

特集号

2011



財東洋療法研修試験財団

## 東洋療法の 質的向上をめざして

財団法人東洋療法研修試験財団は、厚生労働省所管の機関として平成二年（1990）設立されました。本財団の仕事の根幹は、「あん摩マッサージ指圧師、はり師及びきゅう師」の資格を取得するための国家試験を行い合格者の決定、資格を有した者を登録することです。加えて有資格者の生涯研修や東洋療法の有用さを国民の皆様幅広く知っていただく広報活動も行っています。

健康保険制度においてはあん摩マッサージ指圧では筋麻痺・関節拘縮等について、鍼灸では、神経痛・五十肩・頸腕症候群・腰痛症・リウマチ・頸椎捻挫後遺症等につ

## 『JUNTOS』刊行にあいさつ 財団法人東洋療法研修試験財団理事長 大澤 進



いて、医師の同意のもとに健康保険の適用が認められる治療法となっています。すなわち、医療制度上も必要に応じて患者さんのために取り入れることができる通常医療の一つとなっているわけです。

近年、鍼灸はWHO（世界保健機関）をはじめ、世界各国の医学界からも注目されるようになってきました。とくに欧米においては東洋療法の科学的根拠（EBM）を裏付けるための大規模な研究も進められてきていますが、さらに新しい医学の考え方として、西洋医学と東洋療法やその他のオルタナティブ（補完・代替医療）といわれる治療法を総合的に組み合わせる患者さんを診療する「統合医療」という考え方も示され、提唱されつつあります。

東洋療法は中国を中心として普及発展し

## 『JUNTOS』 目次

### 『JUNTOS』刊行ごあいさつ……………1

財団法人東洋療法研修試験財団理事長 大澤進

#### ルポ

### 「あ・は・き」国家資格取得から13年、仲山真由美さんを訪ねる…4

## 東洋療法でしなやかに自己実現を

#### 対談

### 大義ある医療人として……………9

阿部正俊さん×後藤修司さん

#### インタビュー

### 直木賞作家 山本一力さん……………14

## 現代人には自分で自分を治すための 「たすけ鍼」が必要

たもので、特に鍼灸は日本文化の中で独特に発展し、江戸時代までは日本の医療の核の一つでした。明治時代になると、西洋医学を国の医療とする方針のもとに、鍼灸をはじめとする東洋療法はいったん表舞台を去ることを余儀なくされましたが、東洋療法の伝統はもう一つの国民的医療として脈々と受け継がれてきたのです。

第二次世界大後、鍼灸を中心とした東洋療法は再び表舞台に立つことになりましたが、治療家の資格審査は各都道府県に委ねられていました。そのため、どうしても地域によって試験の出題レベルに格差が生じることになり、鍼灸の団体はこの状況を信用・信頼の問題として危機感を抱くようになったのです。昭和六〇年（1985）前後から、「あん摩マッサージ指圧師、はり師及びきゅう師」を国家資格にして、統一的な試験を行い、全体の教育レベルを高めることで東洋療法の信用・信頼を向上させていこうという動きが出てきました。

具体的には、「入学資格を大学への入学資格と同じにする」、「知識及び技能の修学



年限を三年以上とする」、「資格試験を全国統一の国家試験として行い資格を大臣免許にする」という三つの要望のもとに法律改正を求めて国会、関係省庁への働きかけが行われてきました。

こうして昭和六三年の国会でこれらの内容について法律改正が行われました。これを受けて平成二年東洋医療の関連七団体が母体となって当財団が設立され、同四年一〇月資格者の試験と免許登録を行う機関として指定されたわけです。（\*関連七団体とは、社団法人日本鍼灸師会、社団法人全日本鍼灸マッサージ師会、社会福祉法人日本盲人会連合、社団法人日本あん摩マッサージ指圧師会、社団法人東洋療法学校協会、社団法人全国病院理学療法協会、全国盲学校理療科教員連盟）

平成五年二月には第一回「あん摩マッサージ指圧師、はり師及びきゅう師」国家試験が実施されました。北は北海道から南は九州・沖縄まで全国で統一した試験が行われることで、治療家の資質の向上が確保できるようになり、国民の皆さんから安心・安全の評価をしていただくことで、東洋療

法に対する認識や信頼性を高めることができたのではないかと確信しています。

### いのちと健康に寄与する プロフェッショナルとして

さらに本財団は、この国家試験をパスした人たちに対して平成七年度から生涯研修の場を設けてまいりました。この研修は当財団が強制するものではなく、「あん摩マッサージ指圧師、はり師及びきゅう師」の有資格者に「いのちと健康に寄与するプロフェッショナル」として、あくまでも自らの意思で日進月歩の医学・医療の発展に対応できるように研鑽を積んでもらおうとするものです。

研修する内容は、医学教養、基礎医学、臨床の計二〇単位で、それ以外に関連学会への出席を五単位とし、計二五単位を一年間で満たした有資格者に財団として修了証書を交付しております。これらの研修は、全国の関連七団体の支部などが主導して実施されておりあります。

加えて平成二〇年度から財団共催の生涯研修を、全国約一〇カ所で展開するように「いっしょに」という意味があります。東洋療法がいつも患者さんの側に「いっしょに」いて健康を支え続けたいという願いをこめて名付けられました。

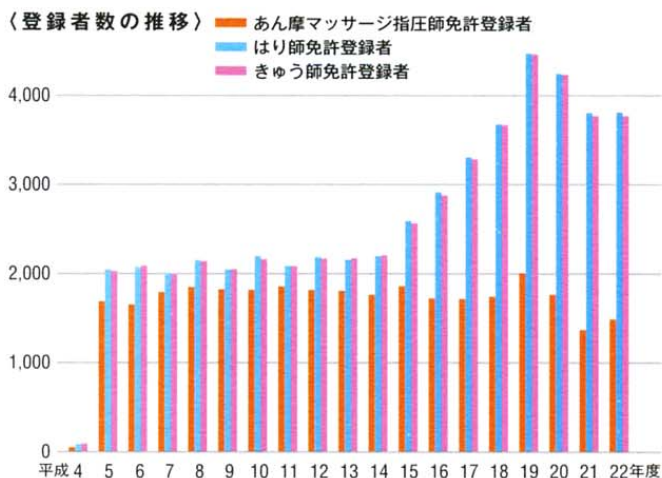
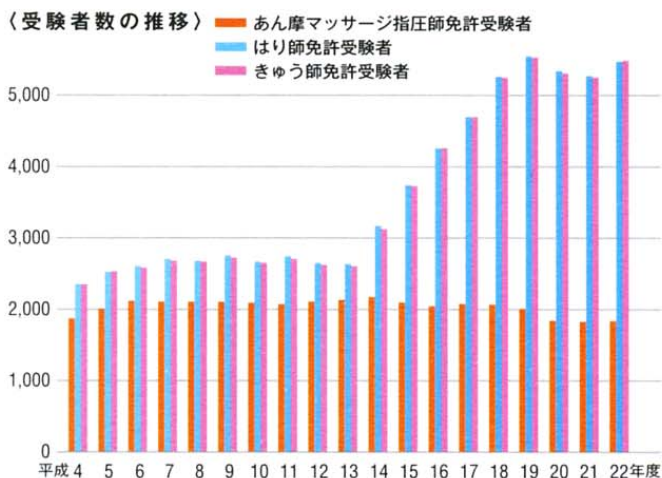
「あん摩マッサージ指圧師、はり師及びきゅう師」国家試験は、来年いよいよ記念

になりました。こちらは医の倫理（リスク管理を含む）及び社会保障論、医療制度、介護保険、年金制の内容を二単位で実施しております。

広報活動による情報発信も財団の大切な使命と考えています。鍼灸をはじめ東洋療法は東洋医学という分野に位置付けられていますが、その姿が国民の皆様にも正しく理解されているかという問題があります。世界の潮流として鍼灸をはじめ、あん摩マッサージ指圧がどうとらえられ、利用されているのか、その良さはどこにあるのか、という効能・効果があるのかといったことがこれまで必ずしも十分に伝わっていません。現在ではネット社会でもあり、できる限り今日的话题を世界の隅々からいち早くキャッチし、さらにそれを広く伝達していくよう二〇一〇年財団のホームページを全面的に改め、さらに情報発信機能を強化させていく試みが始まっています。また、こうした情報を東洋療法の有資格者たちに活用していただくことはもちろんのことです。ありますが、国民の皆様にも東洋療法が世

すべき二〇回目を迎えます。私たちはこれからも「いのちと健康に関わる大切な人材」を確実に選抜し、さらなる資質の向上を目指し、国民の皆様と「いっしょに」、社会貢献していただけるように努めてまいります。

## データで見る「あ・は・き」受験者数と 免許登録者数の推移



平成4年度より始まったあん摩マッサージ指圧、はり、きゅう国家試験は平成22年度の試験で19回目をむかえました。平成22年度までの各受験者数は総計177,124人に達しています。合格者数は145,057人、合格率は82.4%となっています。

また22年度末現在の免許登録者数は累計476,448人となっています。これらの推移は毎年、東洋療法研修試験財団HPで開示されています。

「JUNTOS」という誌名はスペイン語で

「世界で健康管理、健康増進に貢献していることを知っていただけるように、東洋療法と国民の皆様を結び情報誌として、この度、「JUNTOS」を発刊致しました。



# 東洋療法でしなやかに自己実現を

仲山真由美さんは平成一〇年（一九九八）の国家試験で「あん摩マッサージ指圧師、はり師及びきゅう師」の資格を取得して13年、鍼灸による女性のケアとケアに務めながら、さらに領域を広げて化粧品のお社ブランドの開発など美容へのアプローチにも挑戦、東洋療法を核とした治療の可能性を求めて活躍し続けています。

仲山さんが東洋療法に関心を持った

最初のきっかけは大学生の時だった。まだ若い弟さんが当時は失明の恐れもあったという「円錐角膜症」にかかり、その治療のため家族は必死に良い治療法と医師を探し求めた。国内だけではなく外国にも手掛かりを探した。そんな時に中国の鍼はどうかという話を人づてに聞いて、弟さんを連れて中国に行ったのが鍼灸との最初の出会いだった。

た。

二度目は、就職をして会社の証券市場への上場を担当していて仕事に忙殺され、自分を見失いかけていた時。「会社のために尽くすだけでなく、もっと広く社会に貢献をしたい」という思いが募った。ふと弟さんの治療で触れた鍼灸治療の感動が脳裏に甦ってきた。そして「そうだ、私も東洋療法を学ぼう」とそう心に決め、専門学校の間をくぐる。

ぐる。

仲山さんにとって鍼灸学校で学ぶ時は、身をすり減らすようにして尽くす「会社時間」から解き放たれることであり、同時に自分自身のいま、将来を見直す時間でもあった。

専門学校生時代の仲山さんは、一つの明確な目標を持っていた。それは国家資格を取って開業することである。そのためモチベーションを高めようと、



オイルを使ったマッサージ





マッサージ



あん摩



きゅう



指圧



はり

持ち前の積極性を活かし、鍼灸を中心に東洋療法関係の講習会にも時間を惜しんで参加して歩いた。「いま振り返ってみると専門学校での講義・実習はもちろんです、いろんな講習会で学んだことがとても役立っていると思っています」と仲山さんは言う。

国家資格を得なければ自分の描いた患者さんのために尽くすという自己実現をかなえることができない、そんな強い重いが彼女の学習意欲を支え続けたのだ。

国家資格を得た仲山さんは東京・北青山に念願の鍼灸院を開業した。しかし、順風満帆とはいかない。「開業をしたのは良いのですが、患者さんはいらっしゃると、私を見てすぐに引き返してしまふのです。ある患者さんを引き留めて理由を聞きますと、私が若くて信頼が置けないと言うのです」いまでは笑い話のように話す仲山さんにとって、このことは大変ショックだった。

「なんとか多くの患者さんに来院して

もらうにはどうしたらいいか」考えあぐねた末に同じ世代の女性へとターゲットを絞ることにした。そしてそれまでも関心のあった東洋療法による「美容」をテーマに据えたところ、興味を持ってキレイになりたいという女性たちが少しずつ院へ足を運んでくれるようになった。と同時に気づかされたこともあった。来院した患者のほとんどの人が、身体のこわばりや冷えなど、何らかの疾患を抱えていることが分かってきたのだ。

### 病が治れば性格も元

なかでも二十代半ばA子さんとの出会いは、仲山さんの東洋療法の治療家としての方向性に自信を深めた一例として上げられる。

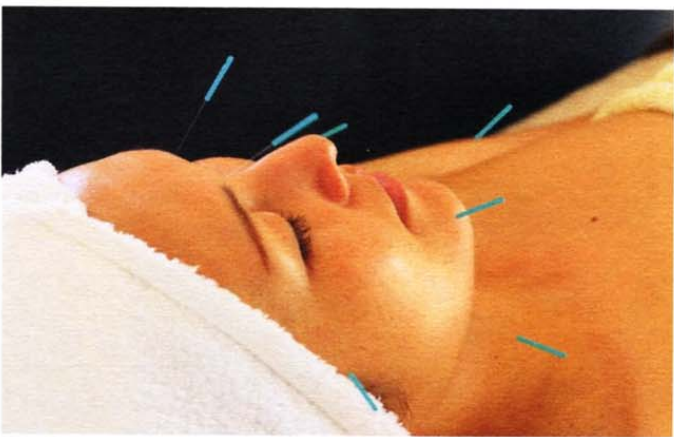
「A子さんは会社勤めの方で、アトピー性皮膚炎に悩んでいました。私の所に来たのは特にお顔に炎症が現れていて、この状態では会社に出ても同僚との付き合いもままならず、時に

は顔からの出血で早退ということもあったようです。お年頃でもあるし、「何とかキレイになって人前に明るく出られるようにしたい」一心から来院されたのでしょうか」

A子さんは仲山さんの所に来る前、病院の皮膚科でステロイド治療を受ける一方でさまざまな代替療法も試みてきた。そしてあれこれと試みる治療はあれもダメ、これもダメとくり返しているうちに治療法や人に対して猜疑心が芽生え、同僚とのちよっとした会話にも傷つき疑うようになる。あげく周りの人からは「性格が悪い」と陰口を叩かれるようになったと言う。

仲山さんは治療方針をしっかりと理解してもらうには、まず患者の訴えをジックリと傾聴することからはじめる、それが大事だと言う。また患者に耳慣れない専門用語をなるべく避け、図解などを多用して説明するよ

う心がけている。相互の信頼関係を作ることが何よりも大切なことだからである。A子さんの場合も、病状だけでなく内面の悩みまでも話してくれるようになったことでさらに踏み込んだ治療方針が打ち出せるようになった。「A子さん、あなたの性格が悪くなっ



美容鍼灸



# 大義ある 医療人として

阿部正俊さんは、厚生省（現厚生労働省）の医事課長時代、「あん摩マッサージ指圧師、はり師及びきゆう師（あ・は・き）」資格取得の国家試験を実現するために、大きな力を注がれました。国家免許という「品質保証」ができたことは、消費者が自分の判断で医療を選び取る時代への大きなステップとなっています。その仕事の意義を振り返っていただくとともに、これからの医療のあるべき姿を語っていただきました。



阿部正俊さん。特定非営利活動法人医療と保険と保健の未来を考える会理事長、元参議院議員



プロフィール  
仲山真由美。1964年、岡山生まれ。あん摩マッサージ指圧師、鍼灸師。  
株式会社カイラ代表取締役、女性のトータルサロン「Fang・Song・fang」開業。

たと思込んでいるのは病気がそうさせているの、病気が治れば性格も元に戻るのよ、そしてキレイになるの」そう話して鍼灸とマッサージによる治療方針を説明したらA子さんはよく理解してくれました。しかし病気はそう簡単にA子さんから離れなかった。Aさんが突如、病院の医師から処方されているステロイド剤を自分から止めたことでアクシデントにみまわれるなど一進一退をくり返しながら、二人三脚の治療が続いた。

健康な生活を続けたいの思いが込められていることを学んだ。「身体が悪いことで思い悩む生活を続けていると確かに顔の表情に陰りが出ます。もちろんリフトアップやシワ取りなども美容に取って大切なことですが、東洋療法を正式に学んでいると心身ともにキレイの根本の所である健康からアプローチできるわけです」



カッピング（吸玉）

最近のA子さんは明るい声で「先生、このごろ洋服を買うのが楽しくて」と洋服に良く似合うイヤリングを揺らしながらオシャレして来院するようになった。「私は「あ・は・き」の国家資格を取得して本当に良かったと思っています。そこから学んだものはひとつながりになっていて、どれひとつとして欠くことのできない宝物と思っています。これまで自分が何かステップアップした

い、何か新しいものとかコレレーションしたいとか考えた時、いつも国家資格が自分の気持ちの後押ししてくれたように思います。それとも思っているのは、国家資格を持っていても患者さんからの信頼を得られる分だけさらなる自己研鑽が必要なの世界だと思っています」

## 阿部正俊さん

## 後藤修司さん

後藤修司さん。財東洋療法研修試験財団常務理事  
社全日本鍼灸学会会長

**制度改革は  
医療の品質確保のため**

後藤 「あはき」は、平成五年（1993）から国家資格としての統一した国家試験が実施されるようになりました。このことにより、国から「この治療家がいい」というお声かけを与えられる責任重大な資格になったものと思っています。当時阿部先生は厚生省におられてその意義をどのようにお考えだったのでしょうか？

阿部 その頃私は、医療の資格関係の元締めを務める医事課長という役職でした。従来医師や看護師（現在看護師）などの医療者は身分法（具体的には医師法、薬剤師法のこと）





民法の親族、相続における身分法とは異なる」という法律により資格が保障されていました。しかしこの法律はよそから入ってくる者を排除しながらその立場を保護するという色合いが強かったのです。「あ・は・き」の人たちもこの身分法の末席に置かれて、身分を保護される立場にあったわけです。しかし、私は基本的に、医療は消費者が選んで自分で判断して受けるべきものであり、立場が守られるべきものではないと考えていたのです。医療の資格というのは保護されるものではなくて、それを利用するための一つの「品質の表示」

だと思っていました。一般の人たちは医療がよくわからないわけですから、それを利用する時の目安が必要なのではないかと考え、それを東洋療法の分野に取り入れようとしたわけです。身分法ではなく資格法であるべきです。

**後藤** 従来「あ・は・き」は都道府県単位で資格認定されていたわけですが、十分に品質は保証されていなかったというわけですね？

**阿部** 試験内容も合格基準なども県ごとに違っていたので、地方によって大きなレベルの差がありました。例えば東京の試験で不合格の人が、地方の試験を受けて合格するということが実際にあったわけです。また、受験資格自体も、中卒の人が二年の修養年限で得られていたわけですから、社会の実情に合わなくなっている面もありました。こうしたなかで私が必要だと思ったのは、東洋療法の質をどうして確保するかということです。ところが、当初はそのことが議論



国家試験に向けての頃を談笑するお二人

も取り入れられたということではないでしょうか。そういう意味で、私も「いい仕事」をしたのかなと思っています（笑い）

**後藤** 日本の医療への新しい考え方の導入につながったわけですね？

**阿部** 私は医療というのは「高度な技術で名医がやるもの」とは必ずしも思いません。日本の医療は、「人間の医療」

ということをちょっと忘れていく傾向にあるようです。例えばお年寄りに病気が治るご利益があるとして人気の東京・巣鴨のとげぬき地蔵を思い出してください。あのお地蔵さんは、タワシ（現在はガーゼを使用）を使って自分の身体の悪い部分に相当するところを洗うと治るという考え方があり、それが長年にわたって続けられました。また、お腹の痛い人にはオブラートにぐるんだ薬もどきもの（多分小麦粉）が売られていて、それを飲むと少しラクになるような気がするといわれます。私は、こういう関わりの中にこそ

されず、試験を受けるかどうか、合格するかどうかばかりが焦点になっていました。制度改革においては、医療に携わる者として、人にどう役に立つのかという「大義」が議論されなければならぬと考えていたのです。

### 「自分の判断で受ける」 という医療の原点が

**後藤** 当時は、いま先生がおっしゃったような大義という考え方は医療界、そして鍼灸あん摩マッサージ指圧界には非常に少なかったと思います。そのため各団体から、制度改革にともなって「あれもこれも変えてもらおう」という希望がたくさん出てきました。そのなかで、やはり医療の品質という点から、方針を「受験資格を高卒」、「三年間の修養年限」、「国家試験による厚生大臣免許」という三つに絞ろうということにまとまり、人にどう役に立つのかという「大義」実現のため七つの関連団体で「あ・は・き法改正協議会」というものを作っていたのです。この経験は非常に大きな歴史的転換をもたらし、今日鍼灸の大学が設立されるといった状況につながりました。

医療の本質があるのではないかと思います。迷信と切り捨てないで、これらを自分で判断して取り入れるのが本当の医療ではないでしょうか。そういう意味では鍼灸治療なども、患者さんが自分で「身体にいい」と判断しながら何千円という負担をしながら受けています。ここにはある意味で医療の原点が保たれているところがあるといえるでしょう。西洋医学とは考え方の体系が異なっているため、なかなかその効果を科学的に立証できないという悩みを抱えているのですが、医療の本質は科学で理解することではなく、人間が理解するかどうかということです。

### 免許更新制導入は 東洋療法として当然の姿勢

**後藤** 国家試験になって以来、私たちは講習会を開催するなど積極的に治療家の資質向上に努めてきました。さらに今原点に戻って、免許が誰のためにあるかを考えた場合、免許更新を検討すべきではないかということも議論しています。一方、国家試験はペーパー試験だけで、実技の試験がないため、在学中の学生に対しては他校の教員を招いて第三者評

**阿部** そもそも医療の資格というのは、自分で責任を持つギルド（中世から近世にかけてヨーロッパで見られた職業別組合）の世界ですね。世界の医療関係者は、品質を良くするために自分たちで研修もやるし試験も行います。アメリカなどでも医療政策をリードしているのは医師会です。ところが、日本だけは全然違って、医療者はお国に許認可してもらおう。おかみ頼り。が続いてきました。医療は国がやるのがすべてではありません。そうしたなかで東洋療法研修試験財団が設立されたことは、ギルドの思想が日本の医療に





価を委託して、実技の標準化の確保を図るようになりました。このように国家試験の導入をきっかけに私たちの中でも大きな意識改革がなされてきたことは間違いありません。

**阿部** そもそも試験は一つの認証の手段に過ぎず、けっして国家がその人の資質を保証するというものではありません。一日の試験で一人の学生の資質すべてを判断することなどできるはずがないのです。そういう意味ではこれからは、医療界の中で医療者としての資質を保つことのできない者を排除する仕組みを作っていくべきだと思います。国民のほうもそういう仕組みを求めていくべきであり、

とが非常に大切なのに、そういう議論から逃げてきたのです。

従来の医療の大半は、被保険者が自分の判断では選択の余地のない、医師が治すしかないものでした。例えば結核などの感染症や、「心臓病」「腎臓病」といわれるように特定の臓器に問題があることがはっきりしていて、それを治せばよいという医療が大半です。ところがこれからは生活習慣病といわれるものが大きな比重を占めるようになります。「生活習慣」というのは医師だけでは治しようがないものであり、被保険者が自分の判断で選択して治していくしかありません。ところがこうした分野に対して、「保険以外の医療はだめだ」とか「格差はいけない」とかいう意見が出ているのです。いまや病気の過半数は自分でコントロールできると考えられるようになっていきます。糖尿病などはその典型ですが、がんなどにしても個人の対応の仕方によっては相当違うということが言われるようになりました。これから医療は個人の選択ということと、保険者と医療者が力を合わせるということがどうしても必要になってきます。

**後藤** 先生が理事長をなさっておられる「医

自分で判断していやな医療者からは治療を受けないようにすればいいのです。ところが、日本の消費者にはなかなかその態度が育ちません。自分の身体であり、自分の健康なので、利用する人が積極的に選択するということが大事なのです。またそれに応えられるように医療者は絶えずスキルアップすることが必要ですから、私は免許の更新制度導入は大賛成です。むしろ、それやっていないのは世界の中で日本くらいのものであり、業界として実行して当然のことだと思います。逆に資質を維持するための仕掛けがきちんとあると医療者の地位が高くなるわけです。

### 東洋療法は 生き方や意欲を支える

**後藤** 素晴らしい激励をいただきました。これから免許を取得する人にこれはぜひ伝えたいことです。すでに各関係団体がやっている二五単位の研修会では、受講すると修了証書

療と保険と保健の未来を考える会」では、未病医学として鍼灸を取り入れてみてはどうかということ提案しておられますね。東洋療法

**阿部** 医療は結局、国民の命と健康が対象ですから、鍼灸がそこでどれだけ有効性を発揮できるか評価していくことが大切だと思います。私はある鍼灸師の治療を見に行ったことがあります。そこはお年寄りがたくさん来院していました。お話をうかがうと人格者としてとても立派な治療家であり、よく話を聞いていねいに「手当て」をなさる方です。一人何千円かの治療費を積み重ねることによってかなり繁盛されているのとことです。現在医療者にはこういう全体を見て手当てする医療の精神が希薄になってきているような気がします。鍼灸の効果の検証は、学会の論文ではなくて、それに対してお金を払って利用してもいいかと思ってもらえているかどうかということなのです。鍼は単に身体に刺すだけのものでは

を出すなど、スキルを更新してもらうための仕組みも設けています。国家試験導入から二〇年になる現在、「医療の質の向上」という原点に戻ることがますます大事になってきました。

**阿部** 医療の質の向上というと、何でも保険診療を認めることという議論がまかり通っています。これはまったくおかしい話です。例えば「医薬分業」というシステムができましたが、これは医師だけでは信用できないので、医師が書いた処方箋を薬剤師がチェックして薬を出すという仕組みです。お互いにチェックし合い「命のリスク」を減らそうということから医薬分業ができました。こんなふうに医療の原点は命を大事にすることであり、他人に簡単に命を預けるようなことをするなという視点です。ここから日本の医療はこういうふうにあるべきだ、制度をこういうふうに作っていくかを考えていかなければなりません。ところが、これまで例えば特定検診などにしても、お金は調達しても中身についての評価は誰もしてきませんでした。社会保険というのは民主主義のシステムですから、こういう評価のもとに対価を払うかというこ

く、ものの見方を示しているのだと思います。本人の生き方、意欲を支えるのが東洋療法なのだということをもっと知ってもらいたいと思っています。

**後藤** 東洋療法は、治療手段だけの意味ではなく、一人ひとりの生活ぶりへの働きかけ、つまり、全人的な関わりがあるのではないかと、貴重な示唆もいただきました。ともあれ、人のために何ができるのかを大義にするという原点を守りながら、自らの資質向上を目指していくために東洋療法研修試験財団は機能していかなければならないと思います。





直木賞作家・山本一力さん

# 現代人には 自分で自分を治すための 「たすけ鍼」が必要



『たすけ鍼』あらすじ

江戸は深川蛤町に住む鍼灸師染谷先生は大の権力嫌いだ。市井の人びとといつも同じ目線で暮らす。それを。嫌いな大金持ちでも病で困っていると聞くと意にも介さず治療に向かう。そして鍼と灸を巧みに使い病を治すと同時に人の心根も直す。

やまもと・いちりき ● 1948年2月18日、高知市生まれ。14歳で上京し、工業高校を卒業した後、通信機輸出会社、旅行代理店、コピーライターなど10数回の転職を経て、1997年に『蒼龍』でオール讀物新人賞を受賞して作家デビュー。2002年には『あかね空』で直木賞を受賞。多くの時代小説を生み出してきた。自転車愛好家としても知られる。



人はナイアガラ瀑布に注ぎ込む川に浮かぶ船かもしれない。

鍼灸師が主人公の小説『たすけ鍼』(朝日新聞出版)で話題を呼んでいる直木賞作家・山本一力さんは、こんな健康観を示されました。自らの鍼灸治療体験や「未病を治す」思想を盛り込んだこの作品をめぐって、山本さんの東洋医学や健康づくりへの考え方を聞く。

## モデルは 実在の鍼灸師

——「たすけ鍼」は、ご自身鍼灸治療を受けた体験が背景になっているそうですが、鍼灸との出会いはどうなふうだったのでしょうか？

**山本** 小説の主人公は江戸深川蛤町で鍼灸師を営む染谷ですが、モデルは私が執筆に入る四年ほど前から鍼灸治療を受けている東京在住の染谷先生です。実在の鍼灸師の名前をそのまま音読みで使わせてい

のですね？

**山本** 先生からとても私の中に響く言葉を聞ききました。私は「目のぐわいが悪い」と訴えたのに、染谷先生は目を調べて目に対する治療をしたわけではありません。脈や舌を診て、手や足に鍼を打つ治療をしたのです。そして、「目が悪いからと言って目の治療のしたのでは治らない」と言ったのです。

現在主流となっている西洋医学はいわゆる対症療法で、胃が痛いと言えば胃の痛みを止める薬を処方するという治療です。でもなぜ胃が痛くなるのかという原因を探っていけば、ひょっとしたら脚の指を怪我したことにたどりつくかもしれません。染谷先生は「人間の身体を末端まで探っていく原因を突き止め、そこから治そうというのが東洋医学なのです」と教えていただいたのです。そんなことを言う治療家が世の中にあると思わなかったので、とても驚きました。

ただ私は染谷先生の治療が「安心できる」とわかっ



※写真は主人公、染谷が活躍する今の深川界限

いただきました。それくらい、この染谷先生との出会いで大きな衝撃を受けたのです。

私は団塊の世代でもあり、パソコンを使って仕事をしているものだから、目を酷使して視力に不安が出てきました。たまたまカミさんが染谷先生の治療を受けていて、「鍼灸を

やってみたら？」と勧められたのです。しかし、普通初めて鍼灸治療を受けるというのは、身体に鍼を刺すということを想像し「痛いのではないか？」とかなり度胸が要ります。

カミさんから染谷先生について、「とてもよくものわかっていては先生だから」と聞いてはいましたが、最初は正直なところ「いやいや」の受診でした(笑)。

それで、実際に治療を受けてみたら、目の前がぼっと明るくなったような気がしたのです。「あ、これはいい！」と思ったのが、通院するようになるきっかけでした。視力がよくなったように思えたのです。

——奥さんの鍼灸経験が良いササスチョンになった

てくると、治療台に乗ってすぐに心地よくなり眠ってしまふようになりました。先生はいろいろお話をしながら治療されるのですが、眠っている私は話しかけられませんが、眠っている私に話しかけるカミさんが先生の話をずっと聞いて、あとでカミさんからその話を聞くということをしています(笑)。

## 病気の根本を見つめる 東洋医学

——「たすけ鍼」では、染谷とコンビを組む幼なじみの漢方医、昭年あきねも登場しますが。

**山本** 私は漢方のほうでもよく知っている先生がいます。京都在住の田村先生です。この先生の治療を受けるとものすごく心が安らぎを覚えます。なぜかという、患者と向き合ってよく話を聞いて

じっくり触診をして、その上でなにが必要かを判断して処方する。つまり、患者を真正面から見て先生なのです。こういうのが本来の医者姿なので



蛤町



はないでしょうか。

——よく「西洋医学は病気を診るけれど、東洋医学は全人的に見る」といわれますね？

**山本** 西洋医学と東洋医学では、根本の思想が違っているわけですね。例えば西洋医学では外科手術の発達によって、かつては諦めなければならなかった命を救うことができるケースが実際出て来ています。臓器移植などは典型的ですね。確かにすごいことだと思っけれど、これは結局手先を器用に使って病んでいる部分だけに働きかける治療ですね。東洋医学は、もっと根本のところを見ているのだと思います。

ところが、日本の今の医学界では漢方や鍼灸を医学とは別のものとして見下す風潮がある。あれは非常におかしいことではないかと思えます。東洋医学は、複雑な身体というものを洞察し経験を積み重ねながら解釈して、現在までも残るような医術書にまとめ上げられました。歴史という点では西洋医学とは比較にな



仙台堀川

らないほどはるかに深いものがあります。それだけの背景をもっているものに対して、現在の医学界はあまりに尊敬が足りないと思います。このことに対して私は非常に憤りの念を覚えます。同時に「医者って何だろう？」と思った時、すぐに染谷先生や田村先生の姿を連想するのです。

**これからは「未病を治す」  
考え方が不可欠**

——東洋医学と西洋医学の大きな違いの一つに、東洋医学は予防（未病）を重視するという点も指摘されますが。

**山本** 染谷先生のおっしゃったことで、もう一つ非常にすごいと思ったのは「未病を治す」という言葉です。現在老人医療はどうあるべきか国の対策が大きな問題になっていますが、日本の高齢者には自分の力で病気を治したり予防したりする発想がきわめて低いと思います。歳を取ったら病気になるものだと思っつけて、もっぱらどうやって良い医

者にかかるかということだけ考える人が多いのですが、これは間違いではないでしょうか？

東洋の人たちが昔から言っている「自分の身体は自分で治す」という知恵が求められていると思えます。

そのこの大切さに気づいたのは、以前に自転車レースに出るために渡米したときのことです。あの国は医療費がべらぼうに高いので、へたに医者にかかることができません。というのは大会前に転んで手首を痛めることがありました。病院に行ったら散々またされたあげくレントゲンを撮られて、包帯を巻いてもらうだけで一千ドル（当時の換算で約九万円）取られたのです。私は旅行保険のおかげでアメリカの病院での治療費を払うことができましたが、向こうの多くの人は支払うことができません、医療が受けられません。アメリカでは病院へ行くと、まず医療保険に入っているのか、支払いが可能なのかということが問われるのです。



黒船橋

一方で、アメリカではドラッグストアなどに行けば、病院と同じような処置ができるサポーターやギプスなどの治療道具が信じられないほど豊富に並んでいます。そして、日頃は病気にならないように、公園に集まってジョギングなどの運動したりして、必死に身体を鍛えているのです。

日本でも「団塊の世代」が高齢化していくこれから五年後は大変なことになるでしょう。そのあたりについて、もっと真剣に考える必要があります。アメリカでは医療費が高額なこともあります。やはり自分の身体は自分で治すという自己管理の考え方が出来ていないといけなのではないでしょうか。

**「ノーリターン」の  
ポイントを知れ**

——日本でもこれまでお年寄りに対して予防医学の立場からいろいろ、呼びかけがなされてきましたが、真剣に考えて身体の自己管理に励んでいる人はけっ



して多くありませんでした。

**山本** 「団塊の世代」の年齢層は日本だけでなく世界的に多いのだから、もうそうは言っていられませんが。誰々のためではなく、自分のためです。私は以前からカミさんと、ホットヨガのスタジオに通って、九〇分間に二六ポーズを二回ずつこなしています。コースを終えるものすごくスッキリするばかりでなく、鍼灸治療で目がよく見えるようになったように、気になっていた不調がはつきりと改善されてくるのです。二回目のポーズでは一回目よりも確実に動く領域が大きくなります。つまり血行をよくすることか、「気」の流れをよくするということで、よい効果が得られるわけですね。

これからはもっと自分の健康を守ることにある程度投資することも必要になるでしょう。こうしたことにみんながもっと本気になって考えれば、高齢化社会はもっと希望のあるものになっていくと思います。

——『たすけ鍼』には、「ひとはだれしもが、おのれの身体をおのれが治す、生まれながらの力を秘めておる。鍼灸や薬は、眠っているその力を、呼び覚ますための助けに過ぎぬで」と染谷先生に言われています。「たすけ鍼」の意味には世直しを助けるという意味もこめられたと思いますが、自分の生命

力を大切にするという時、ちょっと手を貸してそれをやりやすくするという意味もありそうですね。

**山本** その通りです。人間には、「ここから先は折り返せない」という地点があります。ナイアガラ瀑布の上を流れる川には遊覧船が運航されていますが、あるポイントまで行ってしまつと、戻れなくなるこゝとがわかってるので船乗りは絶対にその前に引き返します。医者ならそのポイントは「手遅れ」になるところということになるわけです。きちんとした生き方をしていないと、自分で手遅れの境界線を越えてしまうことになる。「俺は命などどうでもよい」などと、うそぶく人もいますが、本当に境界線を越えてから、「ああ、ここまで来るのではなかった」と初めて気づくことが少なくありません。ですからやはり細心の注意を払ってノーリターンになるポイントを越えないようにすべきです。自分でポイントがわからないという場合は、染谷先生のような専門家の言うことに耳を傾けるということが大切だと思います。ぜひお互いにチェックし合いながら、境界を越えないよう頑張っていきましょう。

——そうですね。染谷先生のさらなる活躍が待たれるのですが、今後の予定は？

**山本** ただいま執筆中とお答えしておきます。

## JUNTOS フントス特集号

発行日 2011年3月23日

発行 (財)東洋療法研修試験財団  
〒105-0012 東京都港区芝大門1丁目16番3号芝大門116ビル6階  
TEL 03-3431-8771 FAX 03-3431-8772  
http://www.ahaki.or.jp

制作 (株)INFプランニング

編集・写真・取材 岡田明彦+林義人+樋口一成+前田秀男

デザイン 熊沢正人+大谷昌穂(パワーハウス)

表紙イラスト おてもりのぶお

印刷 日本印刷株式会社

© 財東洋療法研修試験財団  
本誌掲載記事、写真等の無断転載を禁じます。



(財)東洋療法研修試験財団は  
あん摩マッサージ指圧、はり、きゅうの  
明日を担う人材を支えます。



<http://www.ahaki.or.jp>